

“自分が運動している”という感覚の運動主体感

－ 行動変容を実現するための理論構築とその検証 －

Topics

臨床において運動主体感を定量化する評価ツールを開発
心理モデルに基づき運動主体感を操作するための介入指針を提案

臨床で直面した解決すべき課題

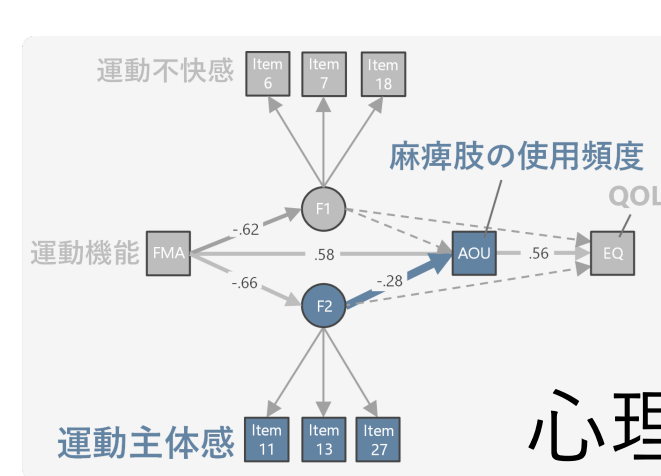


臨床経験

運動障害を有する方では
補助により身体を“動かされる”

「自分が運動している感じがしない」

- ・運動学習の阻害
- ・運動頻度の減少



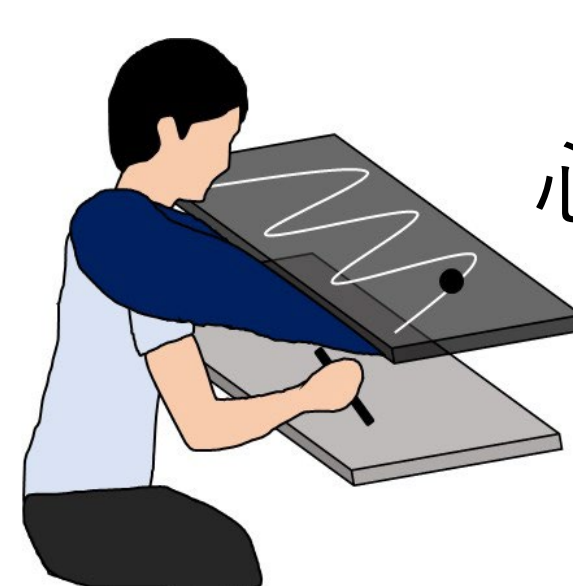
心理学実験と大規模調査

運動主体感の低下が
リハビリの効果を奪う

② モデルの理論検証

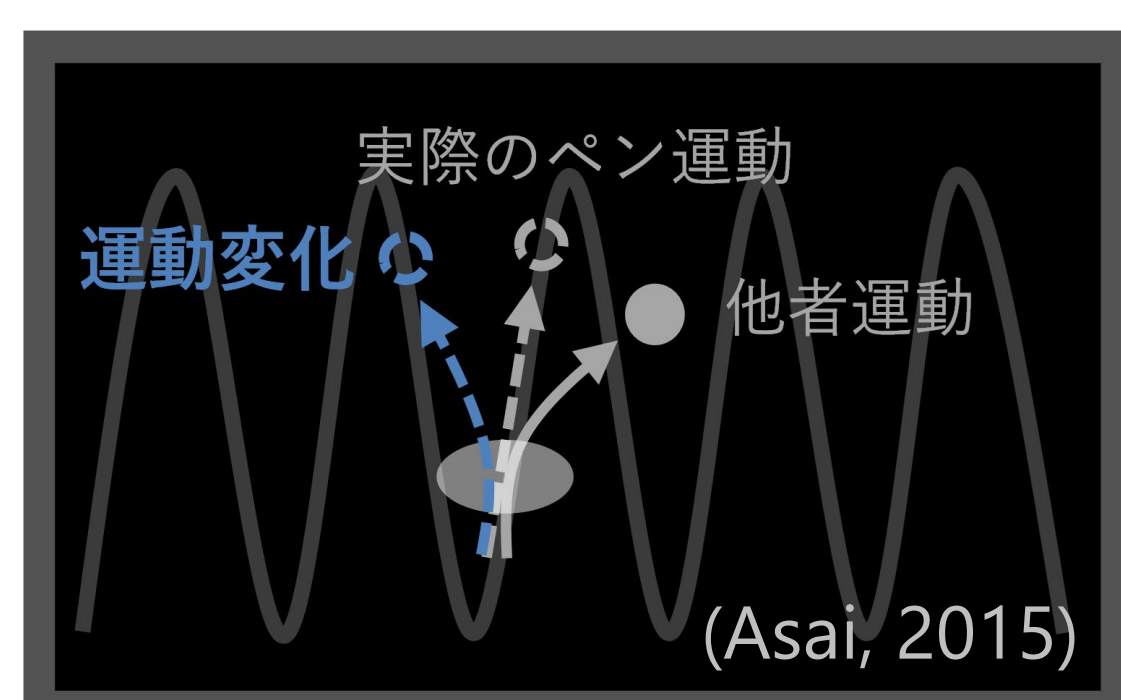
従来の問題点：運動主体感の評価は主観指標に依存

実験心理学の研究技術
である要因計画法を活用



心理物理実験

運動指標による
定量化技術を応用し
心理モデルの要因を操作

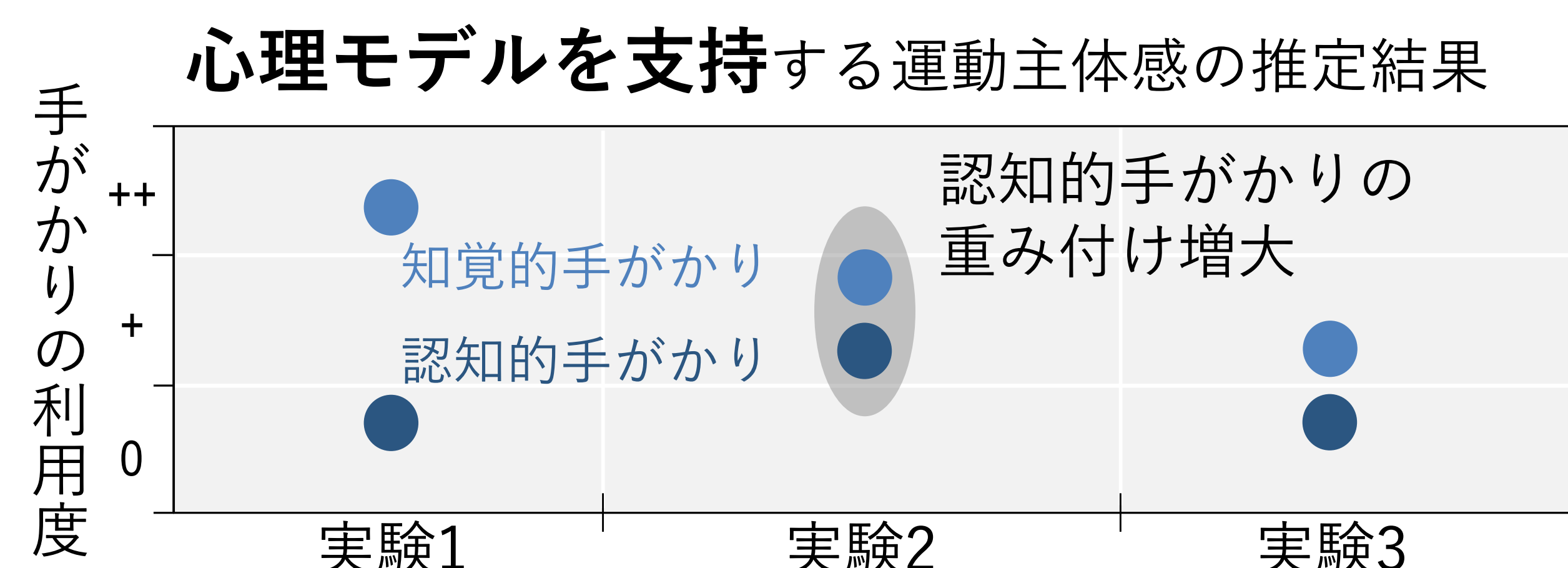


運動指標による定量化

運動主体感の実験上での

“定量化と操作”を実現

健常者を対象にモデルを検証

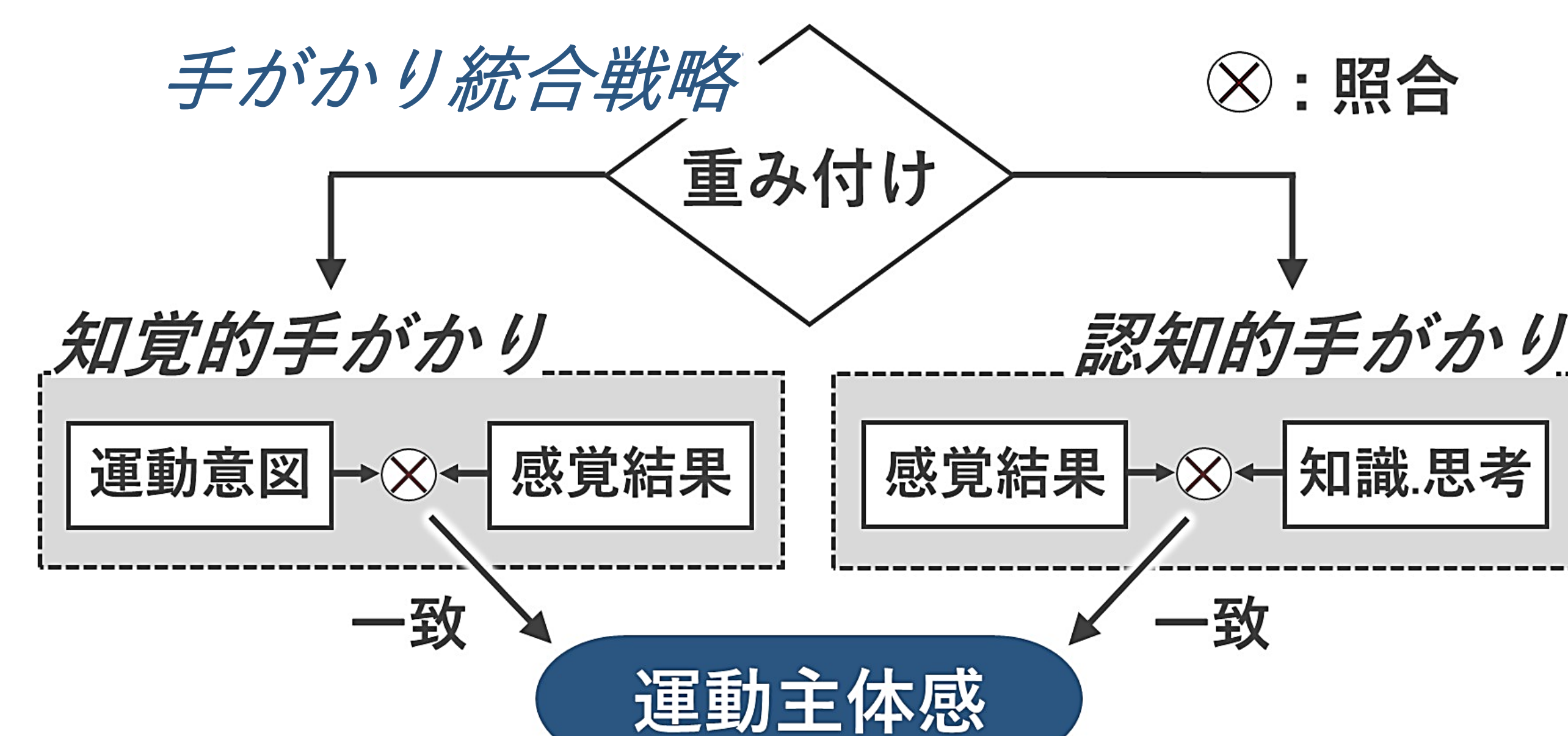


実験2：知覚的手がかりの情報量を減少させた
状況では認知的手がかりの効果が出現

健常者における運動制御時の推定戦略を示唆

① 運動主体感のモデル構築

運動主体感の操作に向けて独自モデルを構築



状況に応じた**推定戦略の変化**を仮説

③ 臨床研究への展開

従来の問題点：経験的・定性的に運動主体感を評価

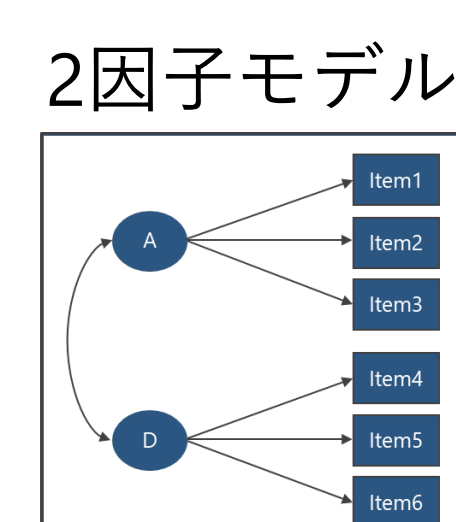
計150例以上の
縦断的研究を展開

多施設連携とデータベース構築



不快感から運動主体感を分離する質問紙を開発

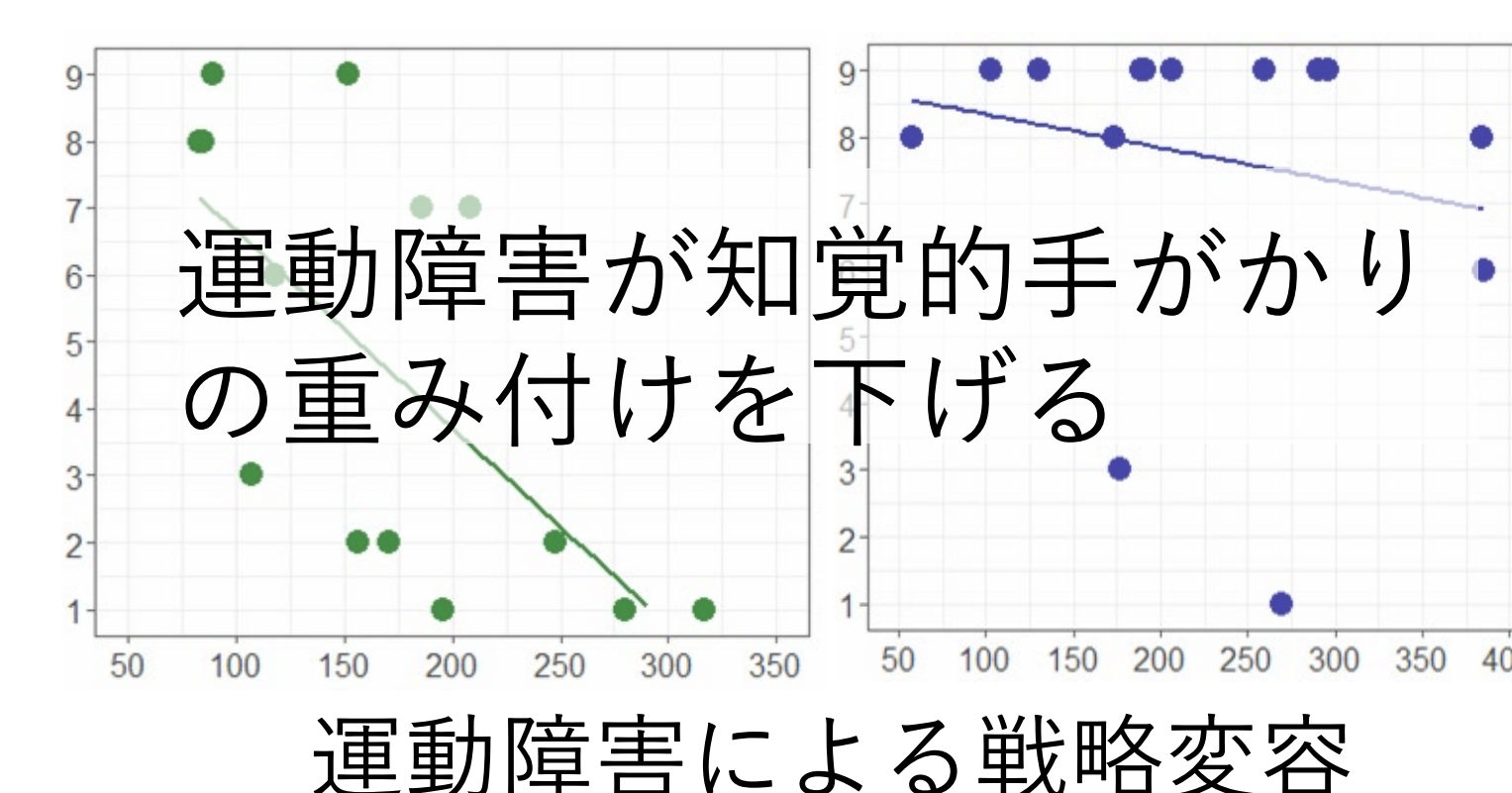
1. 病態に基づく項目作成
2. 因子分析による項目選定
3. モデル比較
4. 妥当性の精査



運動主体感の減少を
介して活動量が減少

モデルに基づき
患者の推定戦略を検証

認知的手がかり
に依存した
手がかり統合戦略



推定戦略 | 健常者：知覚的手がかりに基づく戦略
患者：認知的手がかりに基づく戦略

運動主体感の操作には推定戦略の評価が必要